

旅立着

あと幾日だろう。老衰の高山さん（八十八歳）はいま厳肅げんしゆくの時を待っている。出勤する寮母たちはまず高山さんの手を取り、朝のあいさつをする。かすかに目をあげ、あいさつを返す。

高山さんの荷物を整理していると、タンスの一番見やすい所に白い包みがあり、ひもをかけ、「先のよへのたびだちぎ」と書いた札がつけてある。若い時の写真も添えて。そういえば、「こんな年をとってはあの世の主人も見分けつかない。この写真も忘れないでね」と念を押していた。

「高山さん、これはあなたの旅立着ですよ。写真も入れてありますよ」といって、包みにさわらす。「ハイ」とかすかに唇が動いたようだ。マクラ元においておこう。

死が怖いのではない。死の迎え方が怖いのだ。身も心も衰えはてる中で、高山さんはいま独りで死を迎えようとしている。哲学的表現になるが、最後まで主体的に生きている。その生きざまに私たちは深く心打たれる。

神田さん（九十三歳）も残す日はわずか。ガンも治療不能で退院、再び任運荘へ。個室をすすめても、「ここがよい。この花を見ながら死なせて下さい。このままが極楽です」。部屋から見える庭の花たちと別れたくないのだ。神田さんに旅立着はないが、心のそれはすっかり用意されているようだ。

神田さんは「ひとはひと、自分は自分」と、偏屈へんくつを通す一生だった。しかし、終わりとなると、寮母たちの足は自然としげくなり、手足をさする。優しい言葉も心にしむらしい。すぐ涙ぐむ。心弱くなつたばかりではない、ほとけさんになっていくのである。ここにも自ら安らかな生を願う主体しんたいが蔽かきとして存在する。

生きることは願うこと。人間は最後まで願い続ける存在。任運荘、みすほらしくとも、お年寄りの願いに最後の楽園としてこたえたいと切に願う。

（一九八五年九月二八日）